

白川静のことば
《6》



金子都美絵・画

ことばの終わりの時代に、神話があつた。そして神話は、古代の文字の形象のうちにも、そのおもかげをとどめた。そのころ、自然は神々のものであり、精霊のすみかであつた。草木すら言問うといわれるように、草木にそよぐ風さえも神のおとずれであつた。人々はその中であつて、神との交通を求め、自然との調和をねがつた。そこでは、人々もまた自然の一部でなければならなかつた。

〈中略〉

風は鳳の姿にかかれています。辛字形の冠飾を戴き、豊かな羽をそなえたこの神は、姿なき神として自在に飛行する風神である。人々はその羽音、すなわち風のそよぎによって神のおとずれを知る。春たつとき、この神のおとずれは、すべてのものに新しい生命を与える。秋風とともにおとずれる蕭条たる天地のすがたも、この神のなすわざであつた。

『漢字・生い立ちとその背景』岩波新書 p26～27)

